福祉連携をめざした
紙おむつ等訪問回収研究会

研究代表者：大木町　環境課・福祉課
・地域包括支援センター
共同研究者：トータルケア・システム㈱
北九州市立大学

平成２６年度　研究成果発表会

大木町の概要

平成26年3月末現在

	住民基本台帳
人　　口	14,547人
男	6,911人
女	7,636人
世　　帯	4,756世帯
６０歳以上男	1,983人
６０歳以上女	2,656人
６５歳以上男	1,440人
６５歳以上女	2,052人
高齢化率	24.00%

高齢化率とは人口に占める65歳以上の高齢者の割合です。

高齢者のみの単身世帯（65歳以上）＝496世帯

ゼロ・ウェイストの取り組み	
1993(H5)	ごみ分別開始
2006(H18).11	生ごみ分別開始
2008(H20).3	もったいない宣言
2010(H22).10	プラスチック分別開始
2011(H23).10	紙おむつ分別開始

H24年度　ごみデータ	
分別品目	27
リサイクル率	62. 5%（人口10万人未満全国第3位）
燃やすごみ	1312t（1人1日当たり247g）
燃えないごみ	2t（1人1日当たり0. 4g）
資源ごみ	2046t（1人1日当たり385g）

紙おむつリサイクル　H23.10月スタート

紙おむつ、ﾊﾟｯﾄ、お尻ふき（ウェットティッシュ）が出せます。

指定袋（15L袋、10枚150円）に入れ、口をしっかり結んで出します。

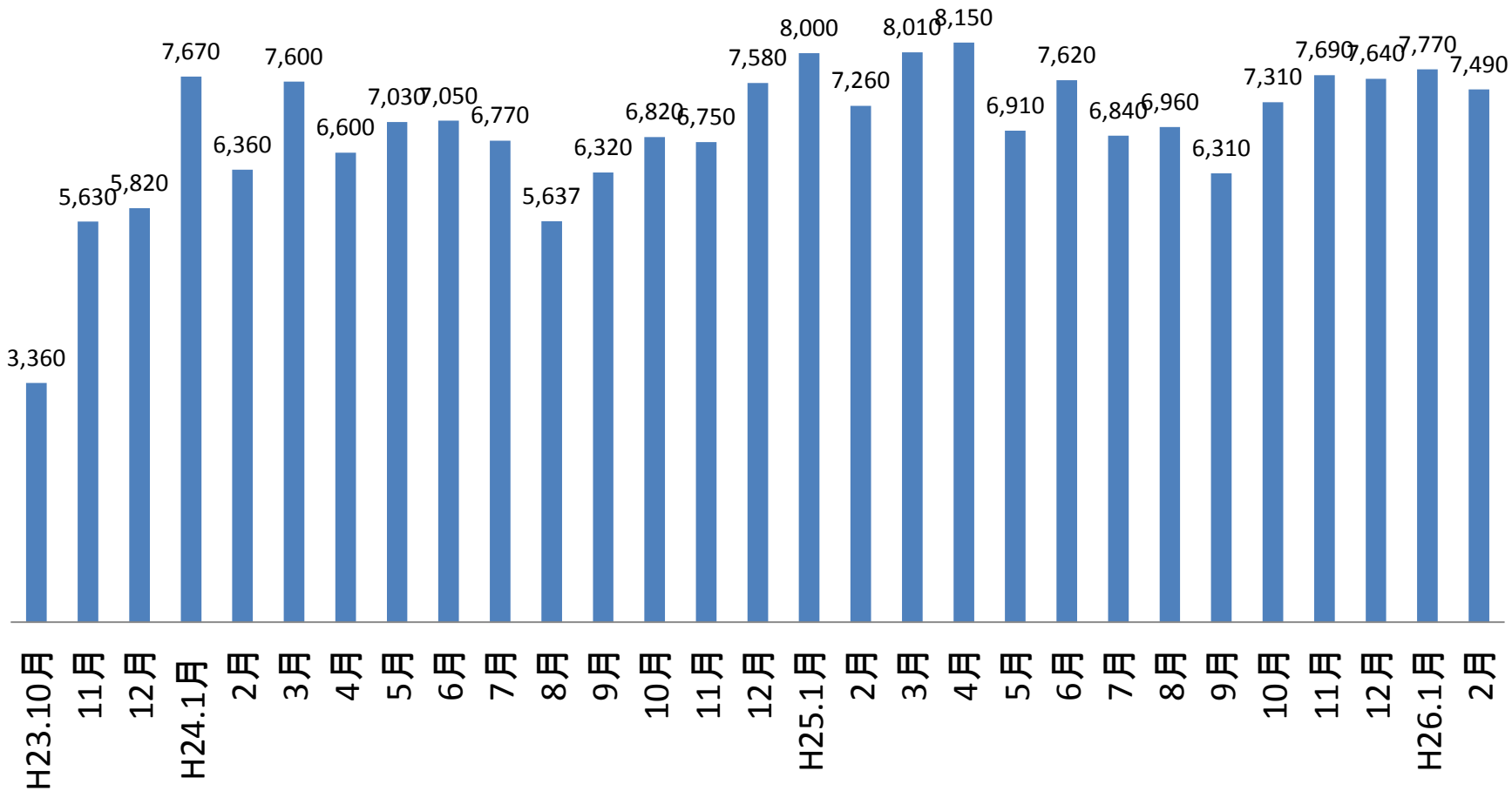
行政区に1箇所程度設置している回収ボックスに投入（いつでも持込みOK）。回収は週2回

大牟田エコタウン内のリサイクル施設で水溶化分離処理。再生パルプを作ります。

再生パルプを外壁材に利用しています。環境プラザ研修室の外壁材もこのボードを利用。

紙おむつ回収の状況

回収量／kg



<u>回収量実績（直近の１年間で試算）：89t／年</u>

目標117t／年

＝ **回収率：76%**

研究目的

- 紙おむつ回収率は７６％に達しているが、回収拠点まで持ち込めない高齢者等世帯の支援対策として、訪問回収事業を実施し回収率を向上させる。
- 紙おむつと合わせ、その他の資源ごみ等も訪問回収し、全体的なリサイクル推進を図る。
- 訪問回収と福祉事業を連携し、高齢者へのやさしい施策の実現を目指す。

訪問回収(ゴミ出しサポート)事業の概要

【排出】

→

【収集・運搬】
シルバー人材センターに回収業務委託

→

【見守り・シルバーサービス事業の展開】

→

【集積場】

環境プラザ

シルバー男女ペアによる回収体制

【シルバーサービス事業の詳細】

ごみ出しサポート事業に合わせ、訪問世帯の高齢者等から、困っていることを御用聞き

→

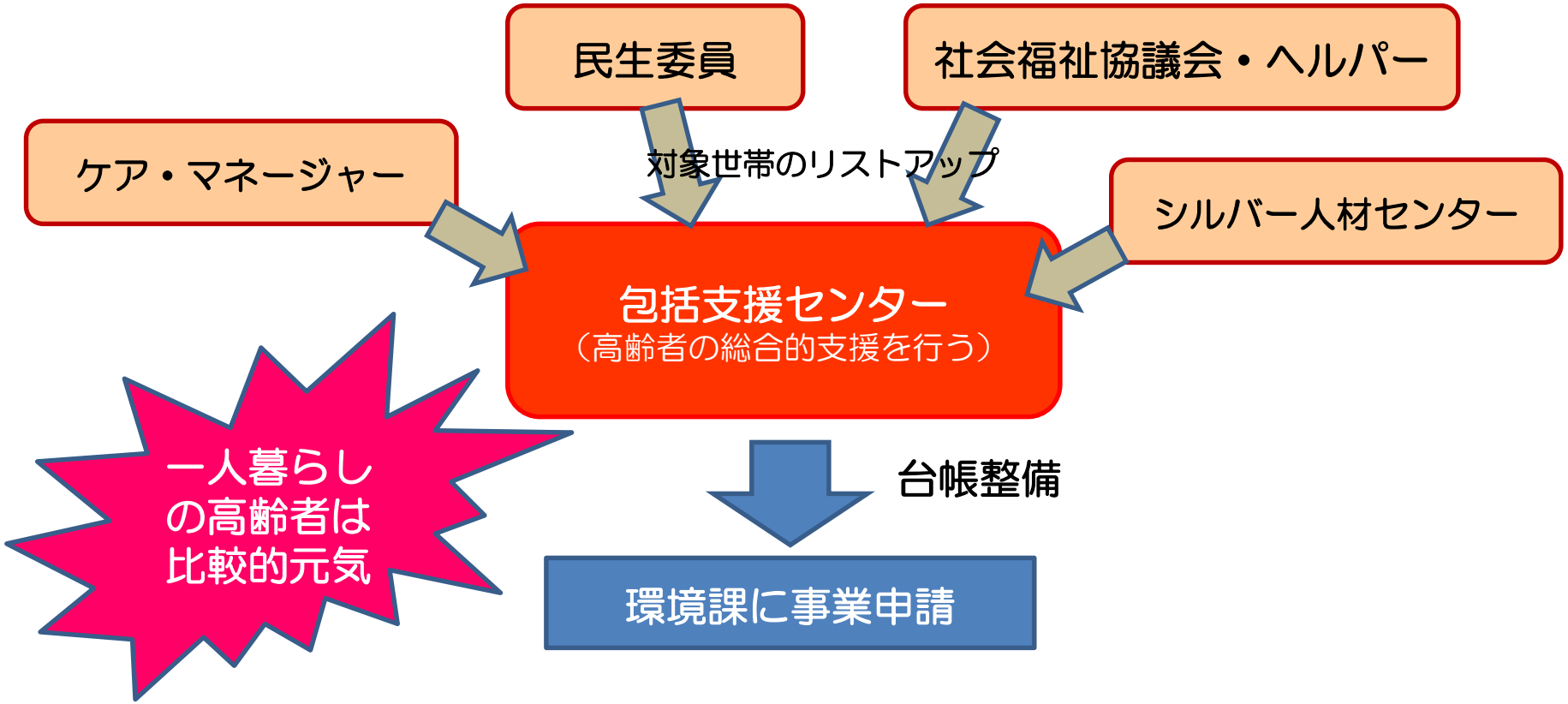
シルバー人材センター事務局へ連絡

→

半ボランティア事業、粗大ごみ回収事業等、他事業を展開

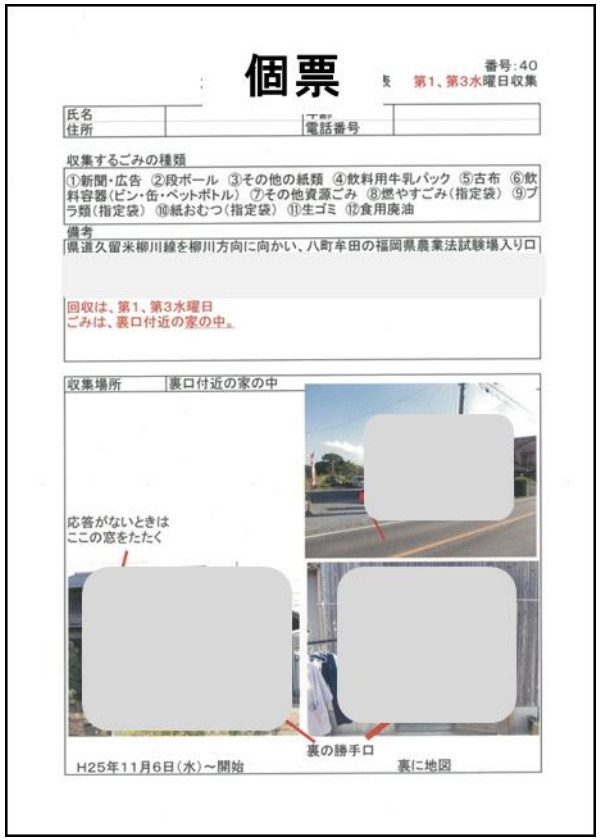
課題：訪問回収(ゴミ出しサポート)事業の仕組み確立

- 対象世帯のリストアップ、台帳の更新
- 包括支援センターを司令塔にした情報の一元管理



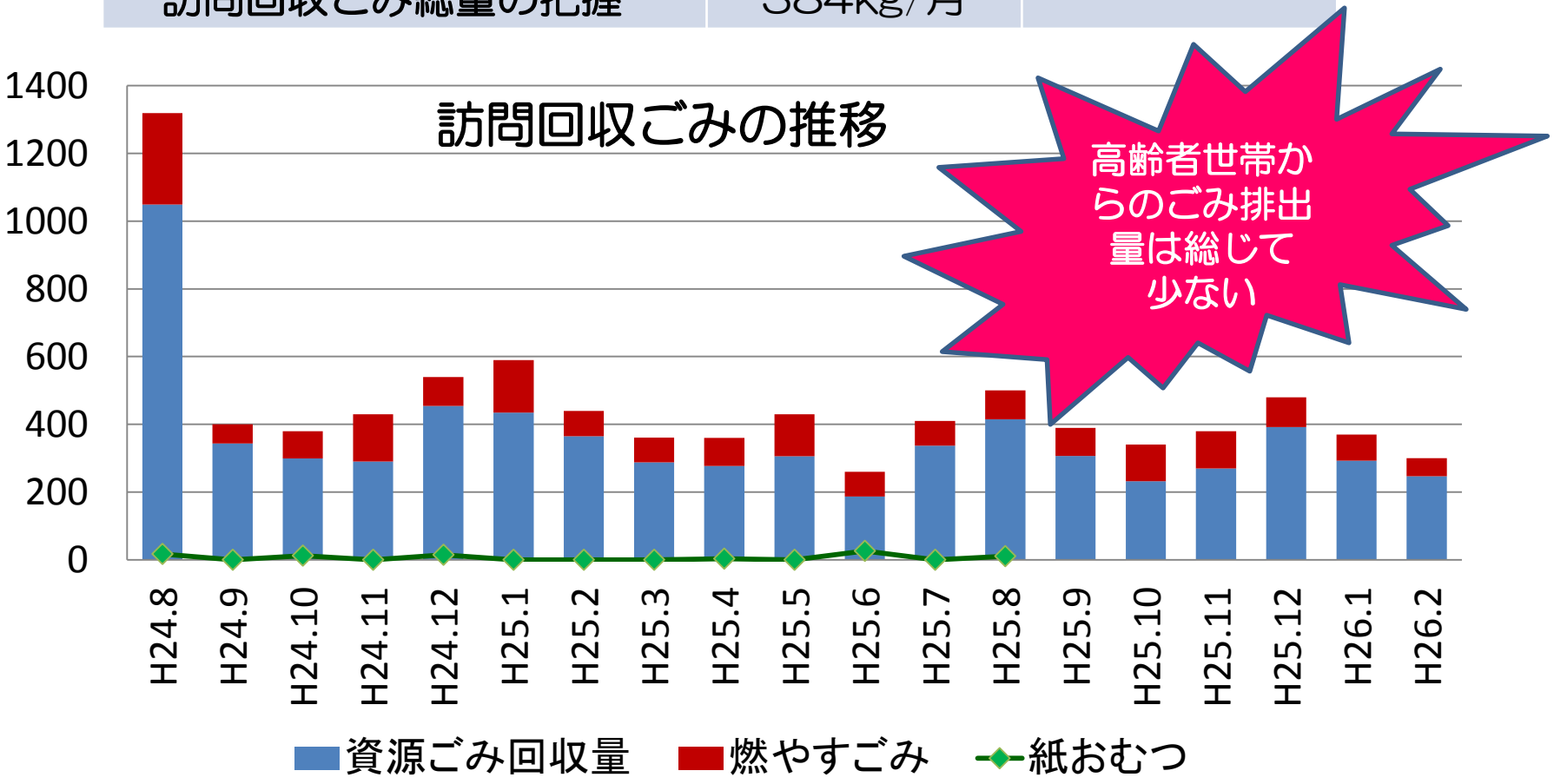
課題：訪問回収(ゴミ出しサポート)事業の仕組み確立

・施設入所等で入れ替わりが激しい高齢者に対応できる体制を目指す



課題：紙おむつ等回収量の増加

区　　分	回収量(実績)	目標
紙おむつ回収量の増加	8kg/月	(300kg/月)
資源ごみ回収量の増加	297kg/月	(360kg/月)
訪問回収ごみ総量の把握	384kg/月	―

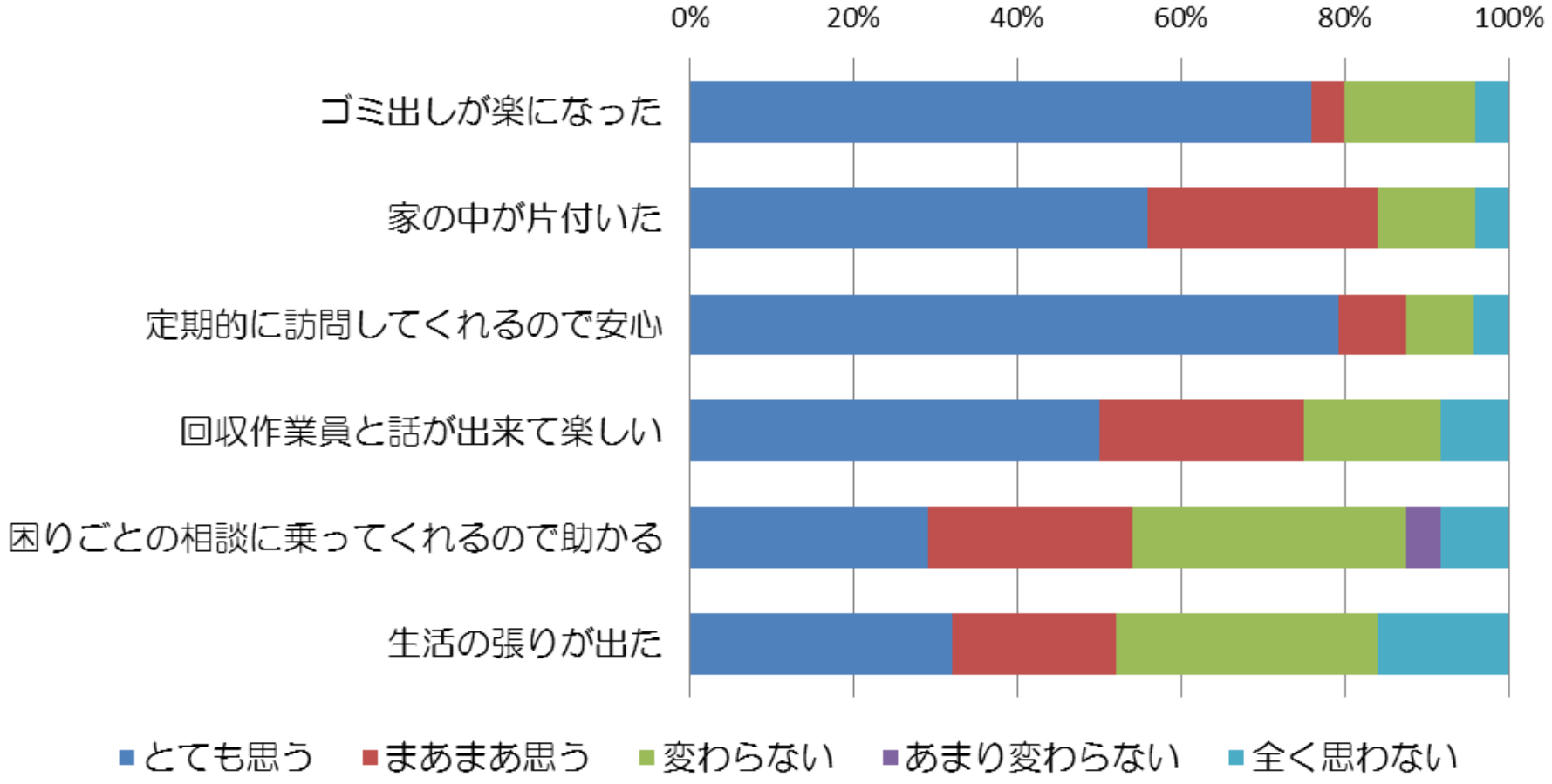


課題：訪問回収(ゴミ出しサポート)事業の総合評価

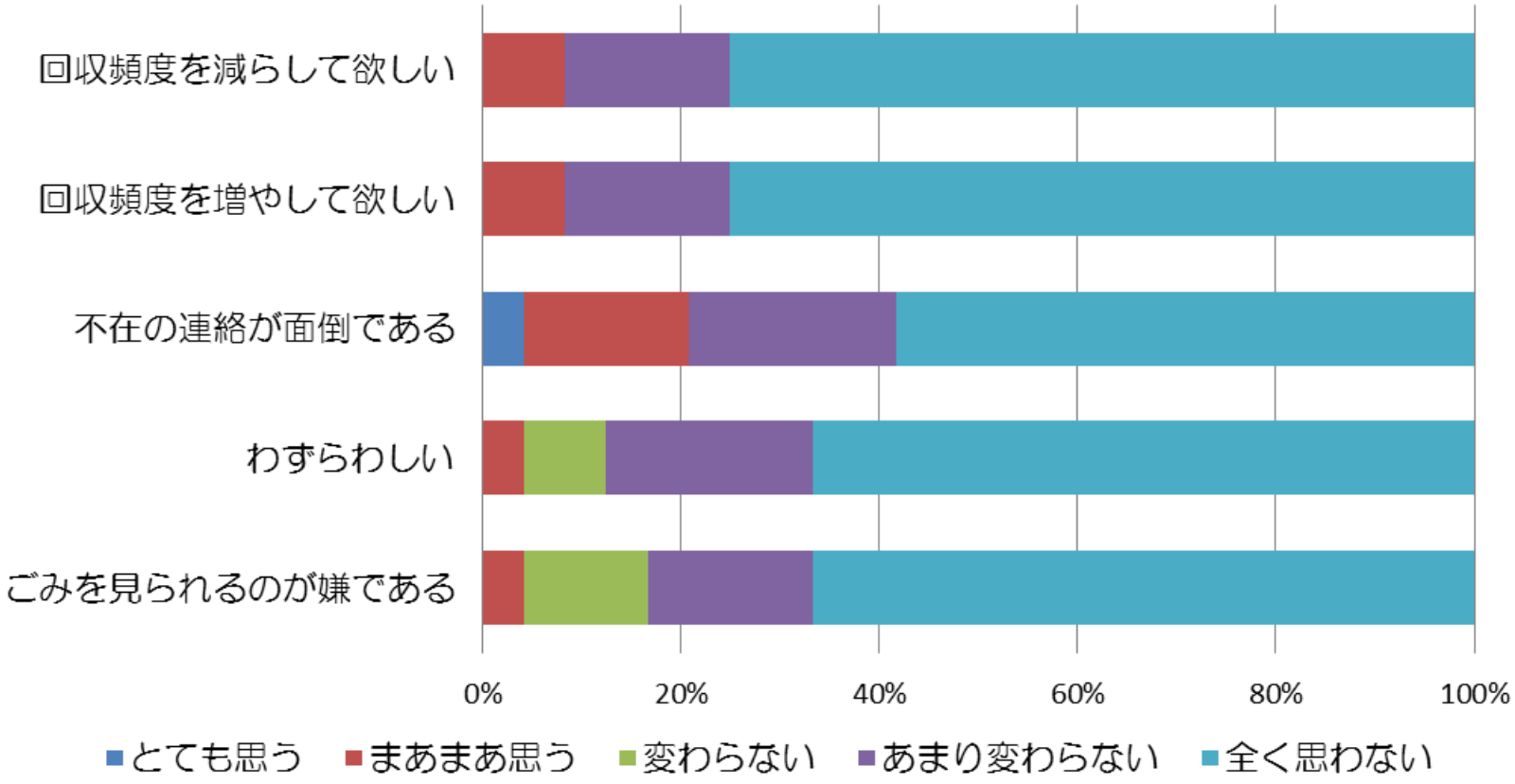
調査対象	大木町の住人		
	ごみ出しサポート事業等対象世帯	紙おむつ支給対象世帯	その他
調査方法	聞き取り調査		
実施期間	2014年1月6日～31日		
調査件数	98件		
調査件数内訳	24件	33件	29件

1.調査世帯属性（調査対象世帯に関する情報）
2.高齢者の日常生活
3.高齢者のごみ出しについて
4.紙おむつ分別・リサイクル事業
5.ごみ出しサポート事業

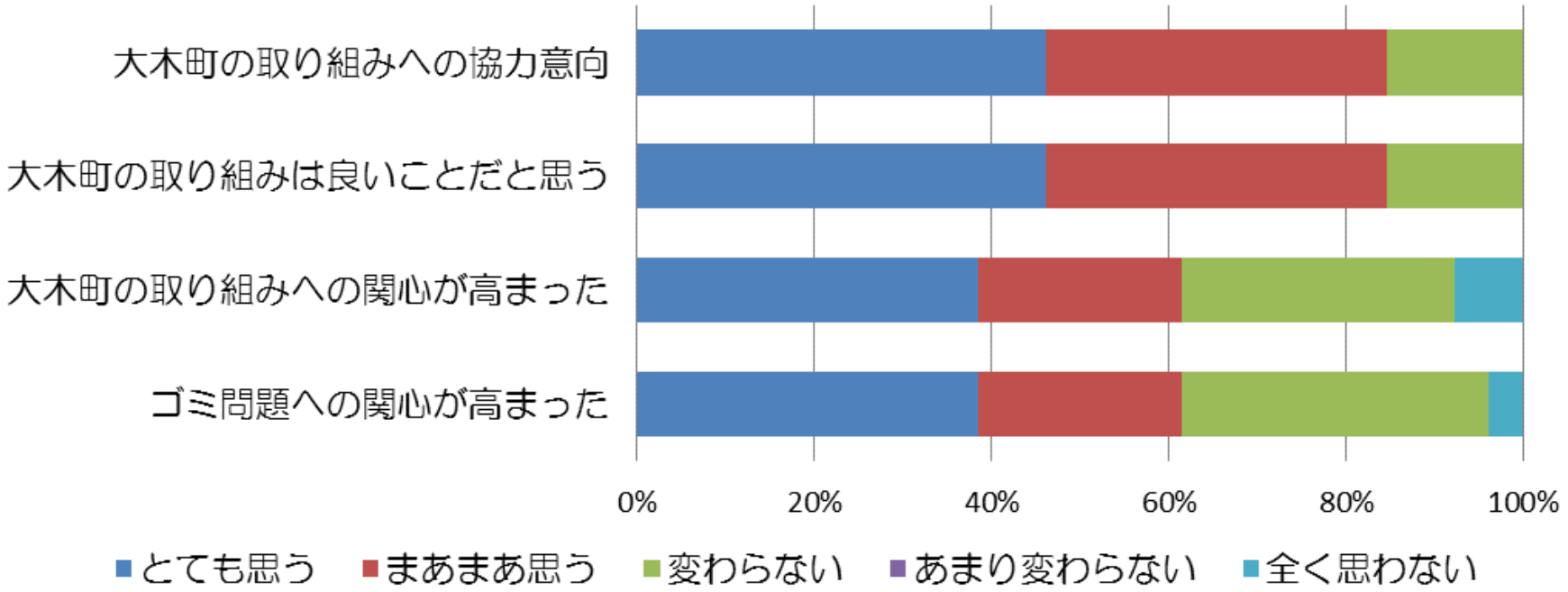
訪問回収(ゴミ出しサポート)事業対象者アンケート１
(事業による副次的効果)



訪問回収(ゴミ出しサポート)事業対象者アンケート２
（事業の改善要望について）



訪問回収（ゴミ出しサポート)事業対象者アンケート３
（大木町の環境に対する取り組みについて）



曜日　熊本日日新聞　（第3種郵便物認可）

紙おむつリサイクル

福岡県の先進事例

（下）

大木町

福岡県大木町は、家庭から出る生ごみを回収して液肥化し、農業に活用するなど、ごみ減量化の全国的トップランナー。2011年から紙おむつの回収を始め、ごみ出しが困難な高齢者らの見守りも兼ねて、ごみの回収支援に取り組んでいる。

同町は、福岡県南西部にあり、人口約1万4500人。08年に町議会が「町もったいない宣言」を議決し、16年までに「ごみの焼却・埋め立てゼロ」を目指している。

「中村さん、来たよー」。1月中旬のある日。シルバー人材センターに登録している石崎允啓さん(69)と中村照代さん(66)が、1人暮らしの中村昭子さん(85)を訪ねた。

手早く生ごみなどを回収する石崎さんらに、昭子さんは「足が悪いので、ごみを出しに行くのは大変。とても助かります」とにっこり。「また来るね」と声を掛けた照代さんは、プラスチックごみなどを分けて軽トラックに積み込み、次の住宅へと向かった。

高齢者宅のごみ出し支援に取り組むきっかけが、使用済み紙おむつの回収だった。

「町の燃やすごみの調査で、紙おむつが11%を占めることが分かり、減量化のため分別回収の検討を始めた」と町環境課の益田富啓係長(47)。

課題となったのが回収方法。生ごみは10世帯ごとに設置された専用バケツに出すシステムで、おむつも同様の方法を検討したが、衛生面やプライバシーへの懸念が出たという。

最終的に、約60カ所のボックスでの回収を決めた。ところが、高齢者が自宅から遠いボックスまでは運べないという問題が発生。12年8月、シルバー人材センターに委託して回収支援を始めた。

支援の対象は、家族などサポートできる人が近くにいない35世帯。毎週水、木曜日に男女ペアが巡回して回収する。

町は、紙おむつの排出量を年間約120トンと推計。現在の回収量は年間約84トンで、益田係長は「自宅で生活している高齢者は自立度が高い。おむつの回収率アップにはあまりつながらなかった」と苦笑いするが、事前に想定しなかった効果があった。

同町では、燃やすごみや生ごみ、空き缶、空き瓶など27種類で分別回収している。家庭まで出向いたことで、支援の対象者が、おむつ以外のごみ出しにも困難を抱え、いわゆる「ごみ屋敷」状態のケースもあることが判明。現在のごみ回収の形が出来上がった。

13年4月から、町包括支援センターと情報を共有して、見守り体制を強化。電球の取り換えなど、日常の困り事にも対応している。「最初は遠慮がちだった高齢者が、寂しいのか今は訪問を待ってくれている」（石崎さん）と話す。

「ごみ出しは従来、訪問介護がサービスの一部として実施していた部分もある。家の前に出すだけでよくなり、福祉サービスも充実させることができた」と益田係長。

町内には、70歳以上の高齢者だけで暮らす世帯が約300。「支援が必要になる〝予備軍〟でもある。先回りして対応する方法を考えていきたい」と益田係長は話している。

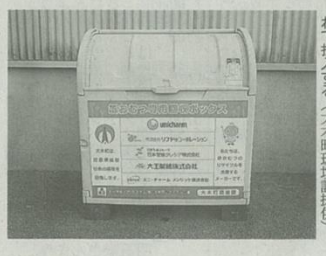
（山口尚久）

ごみの回収で訪れた住宅で、1人暮らしの中村昭子さん（右）と言葉を交わすシルバー人材センターの作業員＝福岡県大木町

回収したごみを分別して積み込むシルバー人材センターの石崎さん（右）と中村さん＝福岡県大木町

高齢者宅を巡回、回収

困り事にも対応 見守り兼ね



大木町が町内約60カ所に設置している紙おむつの回収ボックス。一般の住民は、おむつを有料のごみ袋に入れて投入する（大木町環境課提供）

平成26年2月5日　熊本日日新聞

訪問回収の様子

研究会終了後も継続実施